

# ヨーロッパトウヒ人工林のアトロペリス胴枯病

アトロペリス胴枯病は盤菌類の一種によって引き起こされる針葉樹の病気です。日本国内では北海道でのみ知られており、トウヒ属に発生します。1966年に“トウヒのがんしゅ病(仮称)”として被害事例が初めて紹介され、これまでに32～48年生ヨーロッパトウヒ人工林、エゾマツ天然木、24～50年生のエゾマツ造林木、アカエゾマツ天然木などでの被害が報告されました。エゾマツ、アカエゾマツなどの自生種に対する病原性は弱く、被圧木や下枝などに被害が限られているため、それほど問題となることはありません。一方、ヨーロッパトウヒ人工林では地上高0～2m程度の樹幹に病斑(写真-1)が形成されることが多く、林木の70%近くに病斑が形成されることもあります。罹病木は被圧木を除くと胸高直径が健全木と変わらず、本病がヨーロッパトウヒを急激に衰退・枯死させる可能性は低いと思われませんが、樹幹内部の腐朽と変色(写真-2)が病斑上下にかなり進行するため被害木の経済的な損失は大きなものとなります。人工林への最初の感染源は周辺の針葉樹天然木である可能性が高く、抵抗性の低いヨーロッパトウヒでは生立木上にも子実体(写真-3: 胞子をつくるキノコ)が形成されるので、それが新たな感染源となって被害を広げていくと考えられます(写真-4)。そのため、エゾマツなど針葉樹天然木が残る山間部に造成したヨーロッパトウヒ造林地では本病に対する警戒が必要です。被害木を間伐する際には伐倒木を林外に持ち出すのが望ましく、また、被害率が高い林分は早めに収穫し利用するのがよいでしょう。

(病虫科・普及指導員室)



写真-1 ヨーロッパトウヒ樹幹に形成されたアトロペリス胴枯病の病斑(がんしゅは縦長で黒褐色、年数が経つと幹が深く凹み、ヤニの流出が著しい)



写真-2 病斑の中央部分における樹幹断面(患部にはしばしば枯れ枝をともなう、腐朽材は褐色、くさび形)



写真-3 病斑上に形成された子実体(子のう盤、乾燥時の直径1.5～3.0mm程度、黒褐色～黒色、短い柄のついた皿状)



写真-4 本数被害率68%の32年生ヨーロッパトウヒ人工林(この林分では高い位置に発生した病斑や、複数の患部を持つ罹病木もあった)